

第五回 KK-MAS コンペティション (アブストラクト)

リスキーシフトと政策決定 ~キューバ危機を事例として~

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程

阪本拓人 保城広至

本研究は、1962年のキューバ危機を事例に、外交政策決定過程をシミュレーションすることを試みるものである。キューバ危機に対処するために招集されたのは、ケネディ大統領の最も信頼するグループである ExCom (下図 1 参照) である。彼らが「海上封鎖」という政策を決定するに至るプロセスを、集団極性化現象における「文化価値 / 社会比較」アプローチを援用してシミュレーションを行う。それは、個人は自分の意見と同様に、他人がどう考えているかという意見も持っており、議論によって「一般に考えられている価値」の方向へとシフトするという理論である。

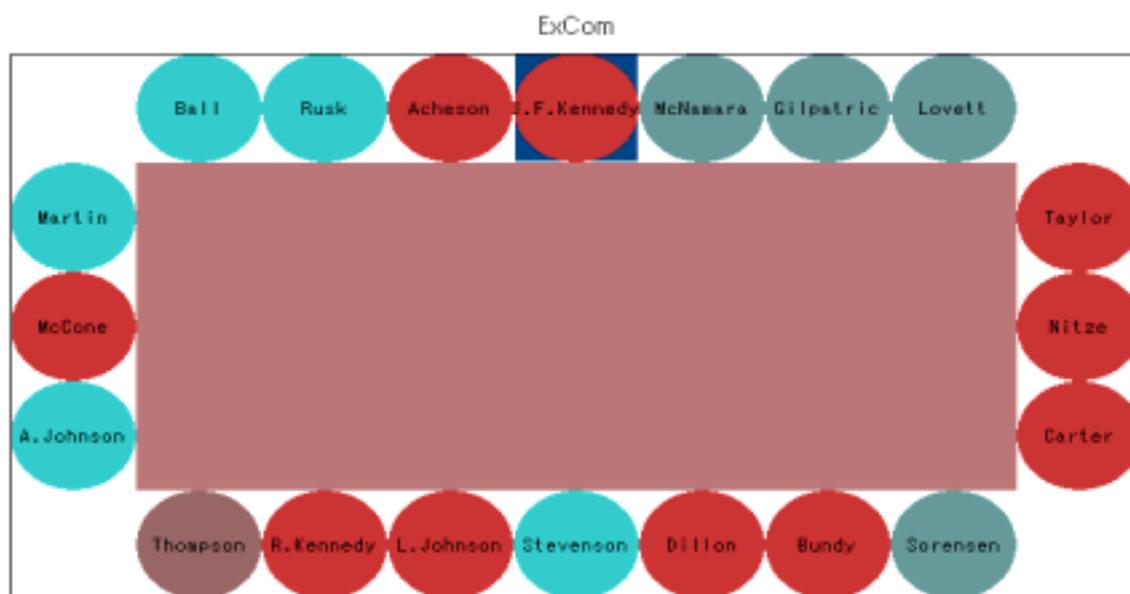


図 1 : ExCom メンバー

シミュレーションは、現実の ExCom メンバーを模した仮想的な 20 人の「討論者 (Discussant)」エージェントが、7 日間にわたって討論することを通じて、各々の意見をダイナミックに変えていく様を表現したモデルによって行われる。個々のエージェントの行動は、「文化価値 / 社会比較」アプローチに基づいてルール化されている。ケネディ政権が取りうる政策は 6 つあり、それらの選択肢に直面した 20 人の討論者の見解が、7 日間の討論を経て、どの選択肢に収斂していくのかを、モデルを用いて検証していくことになる。

シミュレーションによって得られた結果から、「文化価値 / 社会比較」アプローチによっても、現実に近い説明が可能であることが示された。しかも、モデルによれば、「海上封鎖」という現実に起きた選択と同程度の蓋然性で、より危険な「空爆」という手段へと傾斜し

た可能性があることも判明した。すなわち、極めて微妙な差によって、人類は核戦争へ至る道を回避することができたのである（下図2、3参照）。

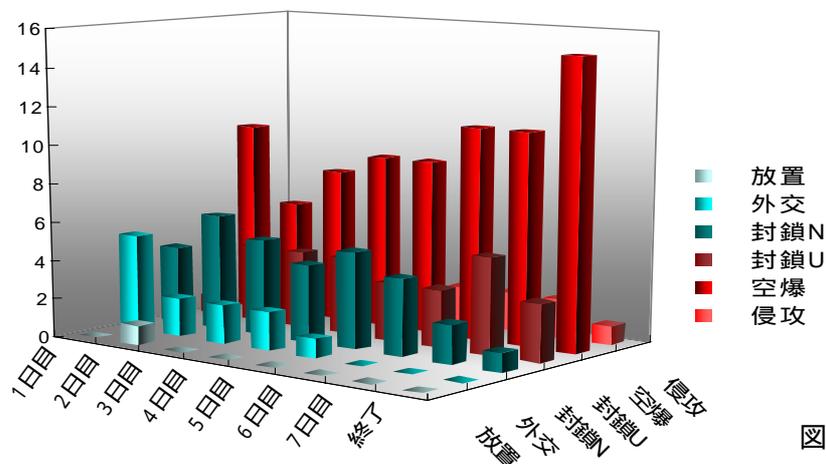


図2：空爆収斂型

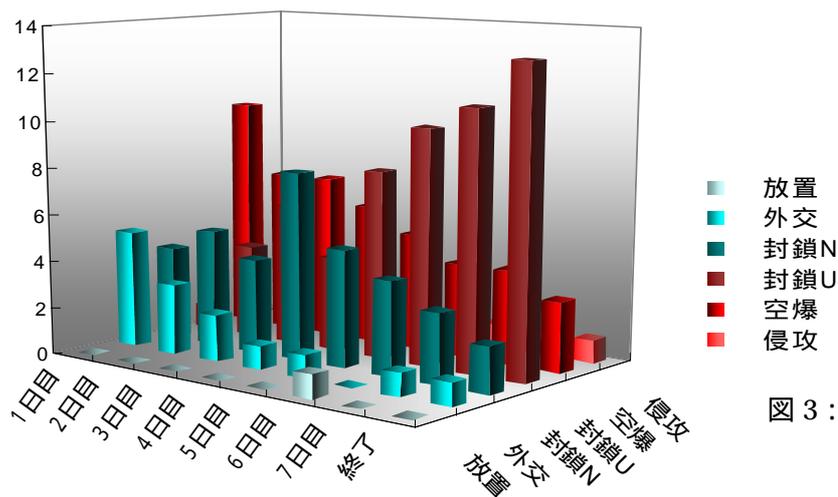


図3：封鎖収斂型

さらに、実際に ExCom のメンバーでなかった人達が参加した場合、どのような結果になったのだろうか、という思考実験を行った。具体的には、頑固な保守主義者であるラムズフェルド国防長官、チェイニー副大統領や、反対に頑固な反戦主義者である元国務長官のパウエルが討議に加わった際の実験を行った。結果、前者の2人が入った時は集団意見に変化がないものの意見の収斂が大幅に遅れてしまい、後者が加わった討議では集団意見をより慎重な方向に導くことが明らかになった。

本研究は技術（シミュレーション）と実証（歴史分析）、社会心理学を融合することによって可能になったものである。モデルの有効性だけでなく、その実用可能性、応用範囲の広さ（例えば太平洋戦争直前における御前会議の開戦決定過程のシミュレーションなどを今後行う予定である）が研究意義として指摘できよう。